



# SF小説が これまで以上に 重要になる理由



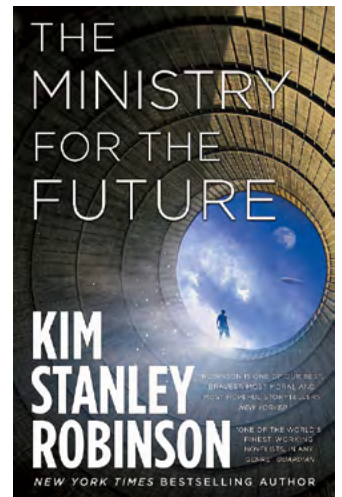
ジョン・エルキントン氏はサステナビリティにおける世界を代表するオピニオン・リーダーである。これまでに“トリプルボトムライン”や“グリーン・コンシューマー”などの概念を創り出してきたが、近年は国連グローバルコンパクトとともに「プロジェクト・ブレイクスルー」プログラムを立ち上げ、従来の延長線上ではない急速な変革でサステナビリティの実現を目指している。

## SF小説の力

年末年始の連休中にいくつかのSF小説を読んだが、その中でも特別に目を引いたのが、キム・スタンレー・ロビンソンの『The Ministry for the Future (仮訳、未来のための省庁)』だった。今のところ日本語版は出版されていないようだが、英語がわかる方は、ぜひ読んでみていただきたい。

SFファンの間では、同氏はSF界の大家として知られているが、私はこの作品に偶然出会った。彼の2017年の小説『New York 2140』の中古本は入手していたが、表紙はなくなっており、見た目もあまり魅力的ではなかったため、当初私はそれをドアストップとして使用していた。文字通りそれに躓いて遭遇したのである。600ページ以上あり、富士山のようにそびえる厚さだったが、一旦読み始めると、私は最後まで一気に読み終えた。

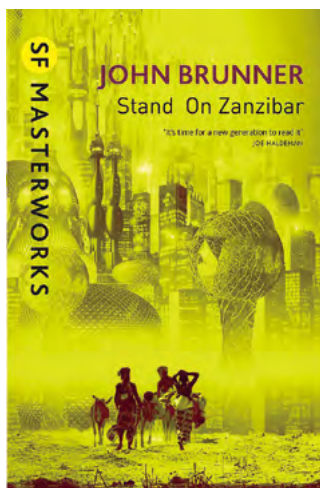
彼の作品をもっと収集したいと思い、564ページと少々短めの『The Ministry for the Future』を注文した。最高の文学作品を表彰する賞であれば、『New York 2140』だろうが、我々は気候問題に打ち勝つことができるという自信を読者に与えるための賞ならば、私は『The Ministry for the Future』を選ぶだろう。



確かに、序盤のいくつかのセクションは、持続可能な開発に関するMBAコースの小説版のようにも感じるが、気にせず読み進めよう。この本の舞台は来るべきCOP58の時代であり、私たちにとって最悪の、気候の悪夢が現実のものとなっている世界である。実際、この物語は2,000万人のインド人が死亡する災害が起きるところから始まる。

## SF小説が示してくれるヒント

考えてみれば、SFは遠近法で成り立っているといえよう。1970年代に私が企業にそっと近づこうとしていた時は、私は潜望鏡を使っているように感じた。その後、企業の役員室に出入りするようになってしばらくは、企業をまるで顕微鏡で観察しているかのように感じた。



私たちは今でもそのような仕事をしているが、すぐに望遠鏡に手を伸ばさようになった。それでも私は長い間、こうした異なるレンズや光学機器と並んで、ある種の万華鏡が欲しいと思っていた。ユーザーによって、あるいは現実によって、揺られれば揺られるほど、より多くの情報が得られる複合レンズである。

数十年前、これから来るべき未来に忍び寄りながら、私はSF作家と間近に会う機会を持つようになった。『Jagged Orbit』や『Stand on Zanzibar』の著者であるジョン・ブルナーとは、以前、興味深いやりとりがあった。私が『Stand on Zanzibar』のディストピア（反ユートピア）的な描写がますます現実味を帯びてきているようだと言え、彼は気まずそうに、これが現実になるのではなく、まだ間に合う内に人々が現実に目覚めることを願っているのだが、と答えた。



その後、私は1983年にフランク・ハーバートにインタビューする機会に恵まれた。同氏の壮大な小説『Dune』を原作とするドゥニ・ヴィルヌーヴ監督の映画が10月に公開される予定だが\*1、この小説は私がこれまでに読んだSFの中でおそらく最高傑作なので、その映画化は本当に待ち遠しい。一方で、彼が私に言ったことが一つ心に残っている。「(現状を)維持管理し、修復するということは、現在の状態を固定化することなので、未来に到達することはない。未来の実現を妨げている」。

それに関連して、最近私が巡らせているアイデアは、SF小説の中で提案されているあらゆる重要な解決策を溜めておくことができるAIを使って、時代を超えて最も聡明な頭脳を持つ人々の創造性を収集して利用するというものである。

1990年の小説『Earth (邦題：ガイア—母なる地球)』を読んで以来、私の大好きなSF作家の一人となったデイビッド・プリンは、すでに、絶滅したマンモスを再生する可能性について語っていた。そのマンモス再生実験に、私は最近偶然にも遭遇することになった。プロジェクトに取り組んでいる人たちに会ってきたのだ。

ここ数十年にわたり、私が最も好きな現代SF作家はウィリアム・ギブソンである。初期の作品である『Neuromancer (邦題：ニューロマンサー)』に描かれた、ありえないほど遠い未来だったことが、後の小説では徐々に現代の現実を不気味に変容させたようになっていく。あるいは、それは前世紀のギブソンの名言のように、「未来はすでに存在している。ただ、均等に分布していないだけだ」。私は、その「ただ、」のあとに「まだ」を付け加えて使うことがよくある。

そして今、中国が浮上し始めていて、私は劉慈欣 (Liu Cixin) \*2といったSF作家の翻訳本を読んでいる。技術的にも経済的にも、ある国の文化水準が向上してくると、そこから世界的なSF作家が出てくるのは興味深いことだ。ヨーロッパではジュール・ヴェルヌやH.G. ウェルズ、アメリカではアシモフやヴォネガットなどがそのような作家だった。



## 総力を挙げて、再生経済を実現しよう

そして今、私は新しいVolansのプロジェクト、Green Swans Observatoryに取り組んでいる。ここでのアイデアは、私たちが持っているすべてのレンズ(潜望鏡、顕微鏡、望遠鏡)を、台頭しつつある再生経済に向けることだ。何が機能しているか、何が(まだ)機能していないか、次に何を試す必要があるかを精査していく。

そして、私はSF小説の万華鏡が、何に当てはまるのかを深く考えている。私は、デイビッド・プリンの開始したTASAT ("There's A Story About That" (仮訳、「それに関する小説あり」)) データベースに触発されて、彼に電話をした。同組織のウェブサイトではTASATについて次のように説明されている。「100年以上にわたるSFの思考実験にアクセスし、作家、学者、図書館員、ファンによる情熱的なグローバル・コミュニティに入ることができる。我々は、明日の課題や可能性に適用できる読書リストを作成することを目指している」\*3。

TASAT—素晴らしい実験だ。ただ、『The Ministry for the Future』で当たり前のように使われている用語をTASATデータベースで検索しても、今のところはほとんど出てこない。Duneシリーズの小説は、荒涼とした砂漠のような惑星アラキスの再生に焦点を当てており、データベースにはそのようなアイデアが含まれるようにすべきだと思うが、そうした知識は、我々全員が本当の再生経済に向かって進むことをどのように手助けしてくれるだろうか。

ビジネス書の半数以上に、「再考 (reimagining)」、「再発明 (reinventing)」、「リセット (resetting)」といった言葉が出てくるような時代、私たちはあらゆる助けを必要としている。

### 訳者注:

- \*1 「DUNE/デューン 砂の惑星」として日本でも近日公開予定。1984年に公開された同名映画のリメイク版。
- \*2 劉慈欣の小説『三体』は日本でも話題となった。
- \*3 TASATは、SF作家のデイビッド・プリンの発案で2017年に立ち上げられたプロジェクトで、現在の課題解決の糸口としてSF小説を利用しようというものであり、課題に応じたSF小説を検索・収集したり、コメントを募集したりできる。カリフォルニア大学サンディエゴ校がウェブサイト運営している。http://tasat.ucsd.edu/

### ジョン・エルキントン (John Elkington) 氏

「サステナビリティのゴッドファーザー (名付け親)」と言われる。チーフポリネーター (媒介者) を務めるVolansを含む4つの会社の共同創業者である。20冊の本の著者であり、最新刊は、Fast Company Pressから出版されたGreen Swans: The Coming Boom In Regenerative Capitalism。これまでに70以上の役員会や諮問委員会のメンバーを務めている。ビジネスイベントや大学で人気のキーノートスピーカーである。